

冷泉家本『源氏小鏡』の性格

—和歌を中心として—

はじめに

『源氏物語』は原典そのものが人々に愛され、引き継がれてきたのもさることながら、原典以外の方法によつて享受されてきた面も大きい。長大な物語であるがゆえに、五十四帖に及ぶ『源氏物語』そのものを、全て手に入れることは容易ではない。また、手に入れたとしても、全編を読破することはなかなか困難である。そこに藤原俊成の「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」という発言や、連歌の流行が重なった。『源氏物語』は、物語そのものを読みたいという読者の立場だけではなく、和歌や連歌の世界でも必読の書となった。そのような流れの中で、原典を読まなくても、『源氏物語』の内容を手軽に知ることができると手引書が、数多く作成されることになった。いわゆる梗概書

橋 本 美 香

といわれる類いで、その中でも他に例を見ないほど、数多くの伝本が存在するものが、『源氏小鏡』である。『国書総目録』によれば、版本も含めるとその数は一〇〇を超える。中世から近世にかけて、最も流布した梗概書といえる。

今回はその中の一本、『冷泉家時雨亭叢書 第九十九卷 源氏物語 柏木 河海抄卷第十五』（冷泉家時雨亭文庫編 朝日新聞社 二〇一五年六月）所収の『源氏小鏡』を取り上げる。

一 『源氏小鏡』の伝本について

『源氏小鏡』は伝本の数が多く、固定した書名を持たない。他にも『源氏目録』『木芙蓉』など、さまざまな書名があるが、内容から『源氏小鏡』として括られている。これらの伝本を、

稲賀敬二氏（『源氏物語の研究 成立と伝流 補訂版』笠間書院 一九八三年

一〇月〈初版一九六七年九月〉）は和歌数をもとに、「百十首本系統」「百三十首本系統」「異本系統」の三つに分類された。その後、

伊井春樹氏（『源氏物語注釈史の研究 室町前期』桜楓社 一九八〇年一月）

は内容をもとに、稲賀氏が「百十首本系統」とされたものを「古本系」とし、それを青表紙本系統の本文に訂正した「改訂本系」、歌を追加した「増補本」、内容を簡略化した「簡略本」、寄合語を持たない「梗概中心本」「和歌中心本」の六つに分類された。さらに、「現存本は古本系に位置づけられた『小鏡』が原初形態であり、他の系統本はそれから派生していると認定することができ」と述べられた。

今回注目する冷泉家時雨亭文庫蔵の『源氏小鏡』（以降、冷泉家本と称す）は、岩坪健氏の解題によれば、「明応三年（一四九四）五月二十六日」の書写で、「第一系統第一類（古本系）に加筆して成立したと認められる」ということである。そして、冷泉家本の特徴として、「寄合とその付け方（付合の仕方）を説明した文章を省略する傾向が見られる」と、「和歌を追加することの二点を挙げておられる。さらに、「当写本に似た伝本としては、横浜本しか見当たらない」と述べられ、この二本は「第一系統に属するが、ほかの四類とは異なるので、第一系統第五

類と定義しておく」とまとめられた。しかし、解題に述べられた内容だけでは、冷泉家本の性格をつかみきれないように思う。そこで、冷泉家本の特徴を和歌の面から考えてみた。

二 『源氏小鏡』の和歌数

まず、『源氏小鏡』の諸本にどれだけ和歌が採られているのかを確認する。今回は系統ごとに代表的な写本を翻刻されている、岩坪健氏編『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院 二〇〇五年二月）を使用し、諸本ごとの和歌の数を調査した。数字は掲載された和歌数であり、併せて後に使用する諸本の略号を括弧内に示した。

第一系統（古本系）……… <small>（伝持明院藏本）</small> 京都大学本（京）112・宮内庁書陵部本（宮）105・国会図書館本（国）104
第二系統（改訂本系）………神戸親和女子大学本（親）137
第三系統（増補本系）………都立中央図書館本（都）163・国文学研究資料館本（文）241・天理図書館本（天）260
第四系統（簡略本系）………都立中央図書館本（都）163・国文学研究資料館本（文）241・天理図書館本（天）260
第五系統（梗概中心本系）……… <small>（伝飛鳥井宗元本）</small> 天理図書館本（理）67・ <small>（飛鳥井宗元本）</small> 京都大学本（京大）110・ <small>（飛鳥井宗元本）</small> 天理図書館本（連）115
第六系統（和歌中心本系）……… <small>（伝飛鳥井宗元本）</small> 京都大学本（京大）203

一見しただけで、第三系統（増補本系）や第六系統（和歌中心本系）は、大幅に和歌が増補されていることがわかる。先にも述べたように、稲賀氏によって「百十首本系統」と分類されたものが、「第一系統（古本系）」である。いずれも百十首前後の和歌を持つことが確認できる。では、冷泉家本はどうか。冷泉家本は、全部で百二十三首の和歌を持っている。百十首前後を古本系（以降『源氏小鏡』の系統は、適宜こちらの名称を用いる）の基本とするならば、少し多い。本文の記述内容からは、冷泉家本も古本系に相当すると思われるが、和歌の数から見ると少し様子が違うようである。

また、古本系諸本の中で、伊井氏が「古形を保ち信頼するに足る善本（前掲書八八〇頁注）」と位置づけられた、第一系統（古本系）の京都大学本（伝持明院基春筆）の百十二首と比較すると、その差は十一首に見える。しかし、京都大学本は冷泉家本にない歌を二首（常夏巻「なでしこの」・藤袴巻「たつめるに」）持っているため、実際は冷泉家本が十三首多く、京都大学本にない和歌を持つことになる。十首以上も和歌が多い冷泉家本を、古本系に入れてよいものだろうか。

三 冷泉家本に追加された和歌

次に、古本系との違いを明らかにするために、冷泉家本がどの和歌を追加したのかを確認する。まず、伝持明院基春筆京都大学本にはない歌をピックアップし、その歌が他の系統にあるのかを調べた。結果を一覧にすると次のようになる。上段に冷泉家本での所在（巻名と丁数）を示し、その下に和歌の第二句までをのせた。

冷泉家本追加和歌（13首）		京	宮	国	親	都	文	天	神	大	理	京大	連	京和
帯木 六オ	ははききのころもしらて													
帯木 セウ	さきまじるいろはいつれに													
空蟬 一〇ウ	かりにたにのきのおきを													
空蟬 一〇ウ	ほのめかすかせにつけても						〇	〇						
空蟬 一〇ウ	うつせみのはにくつゆめ													
空蟬 一〇ウ	さきのよのちきりしらるる							〇						
夕顔 一三オ	いにしへはかくやはひとの													
夕顔 一三オ	やまのはのころもしらて							〇						
若紫 一七オ	さとはみなりはてしを													
花宴 二二オ	ふかきよのあはれをしるも													
葵 二四ウ	ちいろともいかでさためん		〇											
関屋 三八オ	あふさかのせきやいかなる						〇	〇						
							〇	〇						
								〇						
									〇					
										〇				
											〇			
												〇		
													〇	
														〇

冷泉家本が追加した十三首のうち、夕顔巻の「にほとりの」歌と若紫巻の「さとはみな」歌は、『源氏物語』の中で詠まれた歌ではなく、引歌として利用された歌である。冷泉家本は「にほとりの」歌を、「さきの世の」・「うはそくの」の贈答歌（原典とは贈答の順が逆になっている）の後に配置し、三首の和歌が並ぶ形となっている。「にほとりの」歌のすぐ後に「おき中かわとちきらせ給ふに」と続いため、引歌のつもりで掲載したのかもしれないが、見た目では『源氏物語』にも実際にある歌なのかどうかの区別はつかない。一方「さとはみな」歌は、冷泉家本の本文に「きやうのはなはさかりすきちりはて、山のさくらはまたさかりとはいひたれふるうたに、（傍点筆者）」として、歌をあげているため、引歌であることがわかる形となっている（この歌は京大にもあるが、二句目までが「故郷はみなちりはて、」となっており、冷泉家本とはかなり異同がある）。ちなみに、冷泉家本では他に、落標巻「わひぬれは」・藤裏葉巻「あさひさす」・若菜下巻「ゆふやみは」の三首が、引歌としてひかれていますが、これはほぼすべての『源氏小鏡』が載せている。『源氏小鏡』が引歌を載せない方針を取っているわけではない。冷泉家本は、古本系が採らなかつた先の二首を、独自に追加したことになる。

そして、この引歌二首以外に、冷泉家本が原典から追加した

十一首も、古本系にはほぼ見られない。一方で、九首が増補本系の天理図書館本（天）と、八首が和歌中心本系の京都大学本（京和）と一致する。どちらも掲載する和歌が二百首を超えるため、必然的に他本にはない和歌を多く持っている。その点は差し引いて考えなければならないが、古本系にはない歌が、増補された系統と重なる点に注目したい。さらに、六首が梗概中心本系の連蔵筆天理図書館本（連）と一致するのも、興味深い点である。冷泉家本は、和歌の面から見ると、どうも第一系統（古本系）の範疇に収まらない本である気がしてくる。

四 冷泉家本の独自異文

続いて、冷泉家本が持つ和歌を、別の側面から見ていきたい。和歌本文を比べてみたところ、冷泉家本は他の『源氏小鏡』諸本にはない、独自の本文を持っていることがわかった。一字違いなど、誤写レベルと思われるものも含めると二十四首、二字以上の異同があるものに絞っても十二首に、独自異文を有している。それらが『源氏物語』諸本の異同によるものかも、合わせて確認した。池田亀鑑氏編著『源氏物語大成』（中央公論社一九五六年二月）、および源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別

本集成』(桜楓社 一九八九年三月)・『源氏物語別本集成続』(おうふう 二〇〇五年五月)によつて、原典の本文状況を『源氏小鏡』の異同の後に示した。異同に続く丸括弧内は、『源氏物語』諸本の略号である。今回は、いずれかの系統にその本文があるのかを見るのが目的のため、〈青表紙本(青)・河内本(河)・別本(別)〉と大きく分け、諸本間に特に異同がなければ総称で示し、個別に必要なとなった場合は、適宜丸括弧を付して示した。なお、煩雑を避けるため、漢字仮名の区別や仮名遣いの違いは採らなかった。以下、違いごとに分類したものをあげる(和歌本文は冷泉家本の翻刻であり、和歌の後に巻名と丁数を示した。なお、『源氏小鏡』諸本の略号は、和歌数の確認の際に示したものである)。

〈A 一字違いのもの〉

① かきりとてわかる、みちのかなしき^a はいかまはしきはいのちなりけり (桐壺 二才)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連・京和「に」(青・河・別)

② は、き、の、こ、ろもしらて^a ^b そのはらやみちにあやなくまとひぬるかな (帚木 六才)

a 天・京和「こ、ろを」(青・河・別)

★ 京大と(別陽明家本)は冷泉家本と一致

(青伝冷泉為秀筆本)は「こ、ろも(を)」とあり、訂正前の本文は一致。

b 天・京大・京和「そのはらの」(青・河・別)

★ (青伝冷泉為秀筆本・別静嘉堂本)は冷泉家本と一致

◇ 京・宮・国・親・都・文・神・大・理・連…歌ナシ

③ 山かつの^a かきを^b ありともおりくにあはれをかけよなてしこの花^c (帚木 七ウ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・連・京和「かきは」(青・河・別)

★ (青池田本・別陽明家本・御物本・国冬本・穂久邇文庫本)は冷泉家本と一致

b 京・親・文・理・連・京和「あるとも」(青・河・別)

宮・都・神・大「成とも」国「ありとも」 *天のみ一致

c 京・国・親・文・神・大・連「露」(青・河・別)

*cは独自異文ではないが、注意が必要な異同であるため載せた。

「花」の本文を持つ『源氏物語』諸本はなく、冷泉家本と宮都・天・理・京和のみが持つ異文である。ここは古本系の二本と対立。

◇ 京大…歌ナシ

④ ささ^aましる^a いろは^b いつれに^c わかねともなを^cとこ^cなつにしく^c 物^cそな

き^c (帚木 七ウ)

a 天「花」(青田本・御物本・国冬本・肖柏本・穂久邇文庫本・歴博本)

★連と(青・河・別)は冷泉家本と一致

b 天・連「いつれと」(青・河・別) (河七豪源氏)「いつれも」

c 連「物はなき」 ★天と(青・河・別)は冷泉家本と一致

◇京・宮・国・親・都・文・天・神・大・京大・京和「うはそくは」(青・河・別) 宮「うはそくは」

*細かい違いがこの歌を所持する三本はどれも一致せず

⑤ うはそく^aの^aをこなふみちをしる^aへにてこんよもふかきちきりたへす

な (夕顔 一三オ)

a 京・国・親・都・文・天・神・大・京大・京和「うはそくか」(青・河・別) 宮「うはそくは」

◇理・連…歌ナシ

⑥ いにし^aへはかくやは人のまよひけんわかまたしらぬしの、めのみち

(夕顔 一三オ)

a 天「いにしへも」(青・河・別)

★(別陽明家本)は「いにしへの人もかくやは」で語順が違う

◇京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連・京和…歌ナシ

⑦ ゆふ露にひもとく^a はなの^b たそかれに^c ほのかに見えし^d えこそ
ありけれ (夕顔 一三ウ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京和「はなは」(青・河・別) ★(別陽明家本)は「花を」で冷泉家本はいずれとも一致せず

b 京・親・文・天・京和「玉ほこの」(青・河・別)

国・都・神・大「たそかれの」

*古本系の京・国の二本とは一致せず。宮・理と一致。

*『源氏物語』ではいずれの諸本も「玉ほこの」であり、「たそかれに
(の)」は一部の『源氏小鏡』が持つ異文である。

c 京・親・文・天・京和「たよりに」(青・河・別) 理「ほのく」

*これも『源氏物語』とは一致せず。bで一致した理と対立。

*古本系の宮・国、増補・簡略本系の都・神・大と一致。京が対立。

d 京・宮・親・都・文・天・理「えにこそありけれ」(青・河・別)

国「えにこそありけれ」 神「ゆふかほの花」 大「光にこそ有けれ」

*ここは神・大が大きく対立。京和のみ一致。

◇京大・連…歌ナシ

⑧ たちはなの^a かほなつかしみほと、きすはなちる里をたつねてそとふ

(花散里 二八ウ)

a 京・宮・親・都・文・天・神・大・理・京大・京和「かをなつかしみ」

(青・河・別) 国「かをなつかしき」

★ (別)陽明文庫本・御物本・伏見天皇本)のみ冷泉家本と一致

◇連…歌ナシ

⑨ かすならぬ^aなにはのことも^b かひなしになにみをつくしおもひそめ

けん (澤標 三七オ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連・京和「かすな

らて」(青・河・別)

★ (別)天理河内本)のみ冷泉家本と一致

b 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連・京和「かひな

きに」(青・河・別)

⑩ わくらはにゆきあふみちを^a たのみてもなをかひなしやしほならぬう

み (関屋 三八オ)

a 京・宮・国・親・都・文・神・大・京大・京和「たのみしも」(青・河・

別) 都「たのみしを」 天「契しも」 *天が大きく対立

◇連…歌ナシ

⑪ よこふへの^a しらめはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせ

ね (横笛 六八オ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連・京和「しらへは」(青・

河・別) 文「しらへも」

⑫ 見し人のかたしろならば^a 身にかへて^b こひしくせゝのなて物にせ

ん (横木 九二オ)

a 国・親・都・文・天・神・大・京和「身にそへて」(青・河・別)

京大「身にうへて」 *京のみ一致

b 京・国・親・都・文・天・神・大・京大・京和「こひしき」(青・河・別)

◇宮・理・連…歌ナシ

〈B 二字以上違うもの〉

① あふ事の^a よを身したてぬ中ならはひるまもなにかまはゆからまし

(帚木 八ウ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・連・京和「よをしへたて

ぬ」(青・河・別)

◇京大…歌ナシ

② さ、かにのふるまひしけきゆふくれにひるますくせと^a いふかわりなさ^b
(帚木 八ウ)

a 京・宮・都・連「いふかあやなき」

親・文「いふかあやなき」(青・河・別)

国「いふかはりなき」理「いふかわりなき」

天「いふそはりなき」大「いふもわりなき」

神「いふかはかなき」京和「いふかはかなさ」

★(別陽明家本)は「あえなき」(別御物本)は「あやなみ」(別国冬本・

阿里莫本)は「あやなき」となっており、原典にも揺れがある。

冷泉家本は、国・理・天・大と比較的近い。

◇京大…歌ナシ

③ かりに^aたにのきはのおきをむすはすは露のかことをなに、かけまし

(空蟬 一〇ウ)

a 親・文・天・大・理・連・京和「ほのかにも」(青・河・別)

◇京・宮・国・都・神・京大…歌ナシ

④ 山のはのこ、ろもしらて^a ゆく月のうわのそらにてかけや^b きえなん

(夕顔 一三ウ)

a 京和「入月の」★(青・河・別)は「ゆく月は」で冷泉家本に近い

b 京和「たえなん」(青・河・別) *二本とも原典にはない本文を持つ

◇京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連…歌ナシ

⑤ 身を^aすて、^bやすらいぬともきみかあたりさらぬか、みのかけは
はなれし (須磨 二九ウ)

a 宮・親・都・文・天・大・京大・連・京和「身はかくて」(青・河・別)

b 京・宮・国・都・理・連・京和「さすらいぬ」

親・文・天・神・大・京大「さすらへぬ」(青・河・別)

★(別麦生本・阿里莫本)のみ「さすらひぬ」で、古本系三本と一致。

*冷泉家本だけが「やすらいぬ」だが、これでは歌意不明。

⑥ しほくしほとまつそなかる、かりそめのみるめは^a うらのすさみ

(明石 三六オ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大「あまの」(青・河・別)

◇連・京和…歌ナシ

⑦ 身をかへてひとり^a かへれりふるさとにき、しにたる松かせそふく

(松風 四二オ)

a 京・宮・親・都・文・神・大・理・京大・京和「かへれる」(青・河・別)

国「かくる、」天「かへれば」

◇連…歌ナシ

⑧ ^aをとめこも神さひぬらんあまつ袖 ^bふるき世の事よはひへぬれは

(少女 四五才)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大「をとめこか」(河七豪源氏)

★京大・連・京和と(青・河・別)は冷泉家本と一致

b 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・京大・連・京和「ふるきよのとも」(青・河・別)

★(河大島本)「ふるきものとも」・(別伝二条院讃岐筆本)「ふるき世、

にも」・(別国冬本)「ふるきよとみの」と、原典に揺れはあるが、

冷泉家本はどれも一致しない。

◇理…歌ナシ

⑨ 花のかをゑならぬ袖にうつしもて ^aことあやまりにいもやとかめん

(梅枝 五七才)

a 京・宮・国・親・都・文・神・京大「ことあやまりと」(青・河・別)

天「ことありかほに」大「ことあやまつと」

★(河七豪源氏・別陽明家本・保坂本・麦生本・阿里莫本)は冷泉家本

と一致

◇理・連・京和…歌ナシ

⑩ いまはとてもえん ^aけふりのむすほゝれたえぬおもひの ^bなとや

^cこふらん

(柏木 六六才)

a 京・宮・国・親・都・神・大・理・京大・連・京和「けふりも」(青・

河・別) *文・天は一致

b 京・宮・国・親・文・天・神・大・理・京大・連・京和「なをや」(青・

河・別) 都「いろや」

c 京・親・文・神・京大「のこらん」(青・河・別)

宮・国・都・天・大・理・連・京和「残さん」(別阿里莫本)

*冷泉家本のみ「なとやこふらん」だが、歌意が大きく変わる。

⑪ 露けさは ^aむかしもいまもおほゝえす大かた秋のよこそつられ

(御法 七三才)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・京大「むかしいと」と(青・

河・別) ★(別東大本)のみ冷泉家本と一致

◇理・連・京和…歌ナシ

⑫ よそへてそ見るへかりけるしら露の ^aちきりかおしきあさかほのはな

(宿木 九一才)

a 京・親・都・文・天・大・京大・京和「ちきりかおしき」(青・河・別)

国「ちきりかけをきし」 神「ちきりにをける」

★(別国冬本)のみ冷泉家本と一致

◇宮・理・連…歌ナシ

〈C『源氏小鏡』の中で冷泉家本が他の一本のみと一致するもの〉

①さきの世のちきりしらるゝ身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよ

(夕顔 一三才)

★京和と(青・河・別)は冷泉家本と一致

★(別陽明文庫本)のみ「ゆくすゑまでは」

◇京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・連…歌ナシ

②てにつみていつしかも見んむらさきのねに ^aかよひたるのへのわかく

さ (若紫 一五才)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大・京和「かよひける」

(青・河・別) ★(別麦生本・阿里莫本)のみ冷泉家本と一致

*連のみ一致。ただし上の句が「いつしかにてにつみてみむ」のため、

歌意は変わらないが、全体としては異同あり。

③なつかしき ^aいろともなきになに、このすゑつむはなをそてにふれけ

ん (未摘花 一九才)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・理・京大「いろともなしに」(青・河・別) 京和「いろにもなきに」 *連のみ一致

④みをつくしこふるしるしにこ、 ^aにてもめくり ^bあひけるえにはふか

しな (落標 三七才)

a 宮・国・親・都・文・天・神・理・京大・京和「までも」(青・河・別)

大「までに」 神「にてと」 *京のみ一致

b 宮・国・親・都・天・神・大・理・京大・京和「あひぬる」(青横山本のみ)

★京・文と(青・河・別)は冷泉家本と一致

*連は「身をつくしこふるしるしのえにしあればめくりあひぬるなには江のうら」と、別の歌になっている。

⑤こゑはせて身をのみこかすほたるこそ ^aいふにはまさる ^bおもひなり

けれ (螢 五一才)

a 京・親・京大「いふよりまさる」(青・河・別)

宮・国・都・文・神・大・理「いふにもまさる」

天「いふよりあまる」 京和「いふに増れる」 *連のみ一致

b 国・神・大・連「おもひなりけり」 京「心なるらめ」

親・文・天・京大「おもひなるらめ」(青・河・別)

★宮・都・理・京和と(別阿里莫本)は冷泉家本と一致

*京が冷泉家本と対立。二本は原典とも一致しない。

⑥めつらしとふるさと人も ^a まちもみん花のにしきをきてかへるきみ

(梅枝 五七オ)

a 京・宮・親・都・文・天・大・京大「まちそみん」(青・河・別)
神「まちもせん」 *国のみ一致

◇理・連・京和…歌ナシ

⑦ひかりいてんあかつきちかくなりけりいまそ見しよの ^a 物かたりする
(若菜上 六〇ウ)

a 京・宮・国・親・都・文・天・神・京大・京和「ゆめかたり」(青・河・別)

◇理・連…歌ナシ *大のみ一致

⑧たちはなの ^a こしまかい ^b ろもかはらしをこの ^b うきふねのゆくゑしら
れぬ (浮舟 九四ウ)

a 都・神「こしまのいろも」

国・京大・京和「こしまはいろも」(別麦生本)

大・連「こしまかい ^a ろは」(別陽明家本)

宮・親・文・天「こしまのいろは」(青・河・別)

*京のみ一致

b 京・宮・国・親・都・文・天・神・大・京大・京和「うきふねぞ」(青・

河・別) *連のみ一致

◇理…歌ナシ

〈A〉・〈B〉が、『源氏小鏡』十三本と比較して、冷泉家本が独自の本文を持っている歌である。そのうち、A①a②b③a④b⑤a⑥a⑦a⑧a⑨a⑩a⑪a⑫b/B①a②a③a④ab⑤b⑥a⑦a⑧b⑨a⑩bc⑪a⑫aの二十七箇所が、冷泉家本の独自異文となっている。ほとんどがわずかな違いではあるが、誤写として切り捨てるにはためらわれるものも多く含む。冷泉家本が見た本にそうあった可能性もあるため、『源氏物語』諸本の中に、一本でも冷泉家本と一致する本文を持つものを拾ってみる。A②a③a④ac⑧a⑨a/B⑧a⑨a⑪a⑫aの、十一箇所ある。しかしそれは、独自異文全体からすれば四割ほどである。誤写と思われるものもある一方で、冷泉家本だけが持っている異文も多い。また、〈A〉・〈B〉の中で、冷泉家本が古本系の京都大学本と対立する箇所は二十八箇所あるが、そのうち二十六箇所(約九割)は、現存する『源氏物語』の本文と一致する。京都大学本は、それだけ原典に忠実に梗概化されたことだろう。だが、冷泉家本が失われてしまった本文を残している可能性も捨てきれない。

視点を變えて、〈C〉として冷泉家本が他の『源氏小鏡』一本とだけ共通する場合もあげた。〈A〉〈B〉〈C〉の中で、十五箇所が一本のみと一致する。内訳は、京3・国1・天2・大1・京大1・連5・京和2である。古本系の京都大学本（京）と一致する箇所もあるが、梗概中心本系の連藏筆天理図書館本（連）と一致する方が、わずかに多い。⁵連藏筆本といえは、和歌数は百十五首でありながら、冷泉家本追加和歌十三首のうち、六首を有する本であった。本文上は明らかに別の系統であるが、和歌に関しては、何か共通点があるのかもしれない。

もちろん、『源氏小鏡』が系統ごとに正しく写されていたと考えているわけではない。正確に写す意識など、もともたないことは承知のうえで見ても、冷泉家本の独自異文に関しては、すべての『源氏小鏡』の原初形態とされる、古本系の京都大学本と対立する場合が多いことも事実である。そしてその場合、京都大学本が青表紙本をはじめとする『源氏物語』の本文と一致することが多い。冷泉家本が写し間違えたか、あるいは現存しない（発見されていない）別本や、注釈書などによったかは判然としないが、この点からも、冷泉家本を第一系統（古本系）に入れてよいのか、疑問が残る。

五 横浜本『源氏小鏡』との関わり

最後に、『冷泉家時雨亭叢書』の解題にあった、横浜本が冷泉家本と似ているという指摘について確認しておきたい。岩坪氏は、「寄合を減らし、付合の説明文を改変しているが、和歌は時雨亭文庫蔵本より少ない」という簡単な説明をされただけで、和歌数などには触れておられなかった。横浜本は、近藤ひなこ氏「横浜本『源氏小鏡』断章 桐壺く明石／潞標く玉鬘」⁶により、翻刻が紹介されている。しかし、続きは公開されていないため、本文の確認は玉鬘巻までを対象とする。

まず、近藤ひなこ氏「横浜本『源氏小鏡』翻刻断章 潞標く玉鬘」（『物語研究』第四号 物語研究会 二〇〇四年三月）によると、横浜本は「百十首本系統（古本系）」に属し、原典からの引用歌数は百十二首（引歌を入れると百十五首…引用者注）とある。和歌数は百十首前後で、問題なく古本系に該当する。冷泉家本は、横浜本より八首多く、百二十三首（引歌を含む）もあるため、同じ系統と判断するのは、少しためらわれる。

次に、冷泉家本が追加した和歌について確認した。横浜本は追加和歌十三首のうち、九首（帚木「さきましろ」、空蟬「ほ

のめかす「うつせみの」夕顔「さきのよの」・「にほとりの」・「いにしへは」・「やまのはの」・若紫「さとはみな」・花宴「ふかきよの」を持たない。⁽⁷⁾ 横浜本も、古本系に比べると四首増えているが、この部分に大幅な増補があることが、冷泉家本の特徴であると考えている。

さらに和歌本文は、冷泉家本の独自異文二十箇所（玉鬘巻まで）のうち、十五箇所（A①a②ab③a⑤a⑦a⑧a⑨ab／B①a②a③a⑤b⑦a⑧a）が対立する。七割強に相当する数であり、そのほとんどが、他の『源氏小鏡』および原典の諸本とも一致する。特にB①「よを身したてぬ」・③「かりにたに」は、冷泉家本が他の『源氏小鏡』とも原典とも一致しなかった部分である。今回の論旨が和歌の追加と独自異文である以上、これらは見過ごしがたい違いだと思う。

ただし、横浜本は冷泉家本とは相容れないのかといえば、そうではない。冷泉家本と横浜本だけが一致する部分もある。A⑩a「たのみても」・B⑥a「うらの」・⑧b「ふるき世の事」の三箇所である。特にBの二つは、誤写とは言いがたい本文であり、この一致は注目すべき点である。そして、冷泉家本の特徴の一つである寄合語の省略に関しても、寄合語の数や、寄合語を持たない巻など、冷泉家本と横浜本の状況は一致している。

二本の関わりにおいて重要な点だと思うが、これに関しては別の機会に考えたい。

おわりに

冷泉家本は、古本系に独自に追加した和歌を持つだけでなく、和歌本文にも独自異文を持つことが明らかとなった。『源氏小鏡』は伝本の数も多く、幾度となく書写・改訂を繰り返しているために、同系統と分類されるものの中にも、さまざまな違いが見られる。簡単に「〇〇本」と一致するとは言えない状況であるのは確かだが、冷泉家本の和歌本文には、原初形態とされる古本系、および現存する『源氏物語』本文と対立する異文も多く見られた。

また、古本系にはない和歌の追加という面には、原初形態に手を加えようとした痕跡が見られる。しかしながら、増補歌は関屋巻までに留まっており、絵合巻以降は京都大学本と持っている和歌に違いは見られない。このことから、古本系に和歌を追加し、新たな増補本を作ろうとした過程を垣間見ることもできる。そしてそれは、冷泉家本の外題にも表れているように思う。冷泉家本は、表紙に貼られた題簽に「源紙之ますか、み」

とある。岩坪氏も解題で、「源氏」を「源紙」と表記するのも、また『源氏小鏡』を「源氏増鏡」と呼ぶのも珍しい」と述べておられる。この題簽を書いた人物が、冷泉家本の制作者とは限らないが、古本系『源氏小鏡』より、何かを増やそうとしたがゆえの題だとは考えられないだろうか。

さらに、すでに解題に指摘があるように、冷泉家本には寄合語の省略という大きな特徴がある。そして、今回は独自和歌からの考察を試みたが、古本系との違いは他にもたくさんある。他の視点からも見直すことで、冷泉家本の性格はより明らかにするだろう。

いずれにしても、冷泉家本は第一系統（古本系）に収まりきらない性格を有しているかもしれない、貴重な内容を持つ一本であるといえる。

〈注〉

(1) 稲賀氏の分類によれば、百三十首本系統が改訂本系に、異本系統が増補本以降にあたる。稲賀氏は「異本系統は大別して増補の方向に向うものと、省略の方向に向うものがある」と述べておられる（前掲『源氏物語の研究』第三章第二節五）。

(2) 『源氏小鏡』は原典で引歌として利用されている和歌も

採用する。本来は区別が必要であろうが、今回はどれだけの和歌を持っているかを見るために総数に入れた。以下、岩坪氏の『諸本集成』内の歌番号と、今回あげた総数に違いがあるものについて補足しておく。

京112：歌番号は113までだが、一首は傍書書入のため、数に入れなかった。

大110：歌番号は108までだが、真木柱巻「今ほとて」宿木巻「ほに出ぬ」の二首には番号が付されていなかったため、数に加えた。

京和203：歌番号は206までだが、四首は朱書の頭注のため、数に入れなかった。

句宮巻「たかせにか」は、柏木巻にある歌のため、『諸本集成』では柏木巻と同じ歌番号が付されているが、歌が本文中に改めて載せられていたので、こちらは数に入れた。そのため203とした。

(3) 岩坪氏は解題で十四首の追加があると述べられたが、十三首しか確認できなかった。

(4) 空蟬巻にある「かりにたに」「ほのめかす」の二首は、『源氏物語』では夕顔巻の終わりにある贈答歌であるが、『源氏小鏡』諸本の中では共通して空蟬巻にある。

(5) ただし、連蔵筆本は梗概のまとめ方が、一部人物名をはじめに持つてくる特異な書き方（『源氏小鏡』の大半は「このまき〇」といふこと）で書き始めるのが基本）になっており、他の本とは少し性格が違うため、注意が必要である。今回は和歌だけを比

べたため、本文の性格は考慮に入れなかった。

- (6) 近藤ひなこ氏「横浜本『源氏小鏡』翻刻断章 桐壺・明石」〔物語研究〕第三号 物語研究会 二〇〇三年三月）「横浜本『源氏小鏡』翻刻断章 濡標・玉鬘」〔物語研究〕第四号 物語研究会 二〇〇四年三月）

- (7) 近藤氏前掲論文の解説に、一部分のみ早蕨巻の翻刻がある。そこに冷泉家本にはない歌が一首含まれているため、全歌数の差は八首とした。

(はしもと みか／常翔啓光学園中学校・高等学校 非常勤講師)